

24.11.26 「主体的に学習に取り組む態度」と「学ぶ意欲」を高める具体的な実践ガイド

中学校の教員が日々の指導において、生徒の「主体性」や「学ぶ意欲」を具体的に引き出し、それを適正に評価するための実践事例をまとめたものです。文部科学省の指針や、近年の奨学金採用基準の変化（成績だけでなく意欲や目的意識を重視する姿勢）を踏まえ、即効性のある3つの活動案を提示します。

1. 教科活動の実践例：国語科「批評的読解と新聞共同制作」

単なる知識の吸収に留まらず、文章を批判的に読み解き、他者との対話を通じて自分の考えを再構築する態度を養います。

・対象とテーマ：説明文や評論文の読解（例：「環境問題」や「情報の扱い」）。

・活動の具体的な流れ：

1. 個人作業（事前準備）：授業で扱う文章を精読し、主張と根拠を整理するワークシートを作成します。
2. グループ活動（約30分）：5～6人の小グループを編成します。筆者の主張に対する「賛成・反対」を議論し、根拠や具体例を基にグループとしての意見を統一します。
3. 紙面構成（共同制作）：議論の結論と理由を、B4判の新聞形式にまとめます。見出しの工夫や図解を用い、視覚的な分かりやすさを追求します。
4. 相互批評（約5分）：2つのグループ間で完成した新聞を交換し、相手の論理構成や表現について批評的なコメントを記入し合います。



・評価のポイント：

- 思考・表現：主張と根拠が論理的に整理され、新聞として効果的にまとめられているか。
- 主体的に学習に取り組む態度：他者の意見を尊重し、建設的な議論やコメントができているか。

2. 総合的な学習の時間の実践例：「地域課題解決プロジェクト(PBL)」

生徒が身近な地域社会の課題を自ら発見し、解決策を提案するプロセスを通じて、学びの目的意識を高めます。

・活動テーマの選定：「地域のゴミ問題解決」や「商店街の活性化」など、生徒にとって手触り感のある地域密着型の内容を選びます。

・活動のステップ（全5回構成・各50分）：

1. 課題設定（第1回）：地域の現状を調査し、解決すべき課題の優先順位をグループで決定します。
2. プロジェクト計画（第2回）：解決案を具体化し、A3用紙に行動計画と目標を明文化します。
3. 改善と練り上げ（第3～4回）：他グループと案を共有し、フィードバックを受けて計画をブラッシュアップします。この「学びの調整」過程を重視します。
4. 最終成果発表（第5回）：最終案をA3ポスターに集約し、1グループ5分程度のポスターセッション形式で発表を行います。

・評価のポイント:

- 問題解決能力:提案が具体的であり、実現可能性がある工夫がなされているか。
- 改善の姿勢:他者からの意見を真摯に受け止め、当初の計画をより良く改善しようとしたか。

3. 特別活動(学級活動)の実践例:「学級目標の可視化とPDCAサイクルの構築」

生徒自身が学級運営の「当事者」となり、自律的な集団生活を送るための主体性を育成します。



・活動のねらい:形式的な目標設定で終わらず、達成までのプロセスを生徒自身が管理・評価する仕組みを作ります。

・活動の具体的な流れ:

1. 目標設定と議論(第1回・50分):学級全体の目標(例:「全員で協力して行事に挑む」)を決定し、それを達成するための具体的な行動をブレインストーミングします。
2. 可視化ツールの作成(第2回・50分):グループごとに役割を分担し、A2用紙に目標と行動指針を視覚的にまとめたポスターを作成します。
3. 継続的な進捗管理(随時):月に一度、学級会で活動状況を報告します(各グループ3分程度)。他グループからのフィードバックを受け、次月の行動を修正します。

・評価のポイント:

- 積極的な関与:学級目標達成に向け、自分たちにできることを自発的に考え行動しているか。
- 振り返りと改善:報告会での意見を生かし、実際の行動変容に繋がられているか。

4. 指導と評価を成功させるための重要事項(教員向けポイント)

・教員の役割変容:教員は「正解を教える人」から、生徒の主体性を引き出し、対話を促す**ファシリテーター(支援者)**へと役割を転換する必要があります。

・視覚化と構造化の徹底:B4新聞、A3計画書、A2ポスターなど、アウトプットのサイズや発表時間を具体的に指定することで、生徒は活動のゴールを明確にイメージでき、内容に集中しやすくなります。

・多角的な評価の実施:最終的な成果物(新聞やポスター)の完成度だけでなく、作成過程における協働の様子や、ポートフォリオ(学習の記録)を用いた自己評価能力の育成も重要です。

・外部・地域との繋がり:地域の専門家やNPO、企業と連携することで、学習内容が実社会とリンクし、生徒の「将来の目的意識」や「進学の意味」への理解が深まります。

これらの活動は、生徒が「自ら考え、行動し、学びを楽しむ」環境を整えるためのものです。各学校の状況や生徒の発達段階に合わせてアレンジを加え、教科の枠を超えた取り組みとして推進してください。

